

草庵仏教

第209号

(発行日)

2007年11月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月2日と12日。午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8月12日念仏座談会は休みます

宗教の意味とは

現代の日本人の平均的な生活は昔の上流貴族の生活をはるかに凌ぐほどの快適な生活

をしている。衣食はもとより住環境においても、広大な庭園はなくても、冷暖房はいきとどき、上下水も清潔で、多くのものが電化されてすこぶる便利である。さらに医療の面では昔の比ではない。

まして娯楽の面になると、王侯貴族の生活も遠く及ばない。たとえば、ヨーロッパの王侯貴族の楽しみは宮廷に楽団をおいて、演奏させて聴いていた。モーツアルトやベートーベンの音楽も、彼らだけの特権的な楽しみであったが、現代は安価な音楽CDでいくらかでも楽しめる。このような現代の生活は経済と科学技術の発達のおかげだといえる。

しかしそうになると、もう人間には神も仏も入らない、宗教は過去のものだというような考えが盛んになり、「私は無宗教だ」という人が当たり

前のようになっていく。

しかし、経済と科学技術と「人に迷惑をかけない」道徳があれば、もう宗教はいらないのであろうか。

そうはいえない。なぜなら人間にとって、一番大事な問題はそうしたものでは解決できないからである。ではその大事な問題とは何か。

一つは、死と死後の問題。現世の娯楽や享楽を楽しんでいる現代人にとって一番いやなのは「私は必ず死なねばならぬ」という嘆きであり、死後の問題とは「死んだら無くなる」とか「自分は結局どこへ行くのか。死んでどうなるのか」という問題であり、そこに大きな不安がある。人生全体におおっている何ともいえない悲哀は、「私は死すべき存在である」という一点から湧いてくる。

二には、自分の人間性の問題である。自分の人間性や性格に満足している人はいるだろうか。しかし、少し真面目に

反省すれば、自分の心にある利己心の執拗さに直面する。また、それに付随してくる利害へのこだわり、怒りやねたみや怨み心、他者を受け入れられない狭い根性、差別やうぬぼれの心など、内心の醜さが見えてくる。しかも、この自分の心を自分でどうすることもできない、変えることが出来ないという壁にぶつかる。親鸞聖人はことにこの問題、いわば自分の煩惱を除くことが出来ないという壁にぶつかられたのである。

三つには、「どう生きる」とかという問題の前にある「生きる」とは何か」という生の意味の問題である。一体、人生になんの意味があるのかという根本問題がある。それは同時に「自分とは何か」という問題でもある。

生活感情で言えば「むなしさ」「無意味さ」「生きていく実感」が乏しい。「はかなさ」という実感であろう。年金だけの健康だの人間関係のいざこざだの公害だのという人生上の問題ではなく、人生そのものが問題なのである。

四つには、孤独の問題。どれほど親密な人間関係の中で生活していたとしても、やは

り一人一人の心の底はそのただけしか知らない世界が広がっている。その世界では要するに荒野を一人で生きているようなもの。この孤独な魂を、親も子供も、夫も妻も、本当には慰めることができない。

こうした死と死後の問題、エゴイズムの問題、人生の意味が分からぬ問題、孤独の問題など、これらの一番大事な問題に対して現代の物質文明は無力である。ただ「楽」は実現したけど、「人生における真実性」は実現していない。

誰しもの人生の底にあるこの問題を等閑に伏せることは、その人の人生全体が夢のように終わっていくだけの人生になりかねない。それに光をあらしめ道をつけるのが真実の宗教であろう。

中には、こうした大事な問題を自分の思惟や思索によって切り開く人もいるだろう。しかし、そういう能力をもっている人はごくわずかである。

この根本問題に光を見出したイエスや仏陀などの先覚者からの真実の智慧(言葉)に学び習うのがまことの宗教であろう。

(了)

真宗問答(四十)

二 誓偈に学ぶⅡ

「我、無量劫において、大施主となりて、普くもろもろの貧苦を濟わずは、誓う、正覚を成らじ。」

我、仏道を成るに至りて、名 声十方に超えん。究竟して聞ゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ。」

(仏説無量寿経より)

(現代語訳)

(わたしは限りなくいつまでも、大いなる恵みの主となり、力もなく苦しんでいるものを広く救うことができないようなら、誓って仏にはならない。わたしが仏のさとりを得たとき、その名はすべての世界に超えずぐれ、そのすみずみにまで届かないようなら、誓って仏にはならない)

D 「仏説無量寿経のこの部分は、法蔵菩薩が四十八通りの願を建てて、さらに重ねて誓われた部分で、法蔵菩薩の願の要点が強調されているとい

えます。今回はその二回目です」

A 「この前半の部分はどういう内容ですか」

D 「まず、法蔵菩薩は本願を成就して、かぎりなく大いなる施し主になり、それによつて、すべての心貧しく悩み多きものを広く救いたい。もしそれが出来ないようなら仏には成らないと、ご自身の大悲の広大なることをお示しになっていきます」

A 「阿弥陀仏は施し主になって衆生を救おうと誓われているのですね」

D 「ええそうなんです。ここに阿弥陀仏の性格が表されています。阿弥陀仏は私どもにとっての目標でもなければ、お手本でもなく、また単なる指導者や援助者でもありません。施し主すなわち救い主であります」

A 「阿弥陀仏は私の何を助けてくださるのですか」

D 「私の経済を援助してくだ

さるといいうのでもありません。肉体の病気を治してください。仕事を手伝ってください。仕事を手伝ってください。単に悲しいときに優しい言葉をかけて慰めてくださる方でもありません。そうではなくて、私自身の全体をおさめ取って真実そのものに同化してください。方です」

A 「阿弥陀仏に全存在的に助けられるとはどういうことですか」

D 「私の主体をおさめ取ってくださることで、そうでなくでは私の全体は安定しないのです。そういう不安定な状態をこの経文では貧苦と表しているのです。貧苦とは貧しく苦しんでいる者という意味です」

A 「私たちをそのような貧苦な者であると阿弥陀仏は見ておられるのですね」

D 「ええ、凡夫の生はまことのより処を見失った不安定で空虚な生であり、苦悩している存在であり、それをいつまでもくり返している存在だと、仏は見ておられるのでありましょう」

A 「結構楽しい人生だと私たちは思っていますが、仏様が見ている私の存在は虚しく生き、虚しく死んでいつているような苦悩の生である、と」

D 「私たちの生の内実は根無し草のような空っぽだから日々虚しく、それゆえそれを満たそうとして、外にお金や名誉や功績や娯楽など、あれを求めこれを求めて走り回っています。みな一時しのぎの飯のものでしかなく、いつまでも物足りなさに飢えているのでしよう。そういう虚しい人生に真実(仏智による大悲のはたらき)を与え、真実を施してください。そういうお方が阿弥陀仏でありましょう。宗祖のご和讃に

本願力にあいぬれば
むなしくすぐるひとぞなき
功德の宝海みちみちて
煩惱の濁水へだてなし

とあるように、阿弥陀仏にあると人生は虚しく過ぎてゆかない。まことの功德が満ちてくるのだとの仰せであります」

A 「私たちの人生は、お金が足りないとか、健康に恵まれないとか、友達がいないとか、そういうこの世の何か欠乏しているというそれ以前に、

人生の根底に、根本的な欠乏感があるのです。いわば真実(智慧と慈悲のいのち)がない、真実にであっていないということですね。この欠乏感はこの世の財物とか娯楽とかよき人間関係とかいうものでは満たされないのですね」

D 「そう思います。阿弥陀仏はそういう真実そのものの名であり、大いなる施し主であるということは、阿弥陀仏は無阿弥陀仏として与えてくださる。ですから南無阿弥陀仏をいただいた人は阿弥陀仏をいただきます」

A 「阿弥陀仏を私に与えてくださるといのはどのようなことですか」

D 「阿弥陀仏の徳(大悲のまこと)を南無阿弥陀仏の名号として、私に与えてくださる。南無阿弥陀仏をいただいた人は阿弥陀仏の徳をいただいた人です。しかし、この功德が全現するのはこの世のいのちが終ってだといわれています」

A 「無限な阿弥陀仏が有限なる私に与えられるというのは不思議なことですね」

雑記帳

高名な評論家の立花隆氏が「脳

研究ですこしずつわかってきているのは、人はどうやってものを見ているのかとか、どうやって手足を動かすのかといった、情報処理や運動のサブシステムのメカニズムでしかない。脳には、視覚系が

集めた情報を受け取る主体がどこかにあるはずである。手足を動かす前に、手足を動かして何をどうするかという意志的決断をくだす意図の座があるはずである。ところが肝腎かなめのところは全然わからないのである。いくら研究しても、わかってくるのは下位のシステムの局所的メカニズムでしかないのである」と言っている。

たとえば、外界の物を見る場合、たとえば、水原舜爾氏（岡大医学部名誉教授）の説明によると、

「外の物を見ると、眼球網膜にある感光細胞の中で、一種の光化学変化が起こります。すると、このタンパク質を包んでいる小さい袋（ペジクル）の膜の透過性が変化し、この膜を通して、カルシウム・イオンがペクジルの外に流出します。この変化が、網膜にある視神経細胞を刺激して、これに電気インパルス（興奮）を発生させ、

このインパルスは視神経細胞の軸索を伝わって中枢に向かって流れる。こうして視神経細胞の軸索を流れる電気インパルスは、間脳にある外側膝状体と称する部位で、次の神経細胞に伝えられる。その場合、神経細胞に発するインパルスがその軸索の先端の小胞状のシナプスに達すると、その内部にあるある化学物質（化学伝達物質）が分泌され、次の神経細胞に働きかけて、電気インパルスを発生させます。ついで、間脳の神経細胞に生じたインパルスは、後頭葉の視覚野の神経細胞に伝えられます。さらにその信号（情報）は頭頂後頭連合野や側頭葉などに伝えられて、これらの部位の協力を得て解読され、ある物体が、それと解る。しかし（わかる）ということとは、この解読された情報がさらに我々の意識にのぼらねばなりません。これは大脳生理学者にも解らない」と言われる。

いわば、目の前の犬を見ると、神経細胞を伝わって脳システムに入り、その情報が視覚野の神経細胞にまで電気インパルスとして伝えられ、さらに脳の中核部にまで、電気的・化学的反応として伝えられるが、その信号的情報を（ああ犬がいる）と認識し判断し、（かわい）と感じる、そういう心がなぜどこに起こるのか、またどうして

起こるのであるのか。あるいは、例えばバッハの音楽を聴くと、楽音は音波となって耳の内耳である鼓膜を振動させ、その振動が神経細胞を刺激してインパルスを発生させ、脳内の聴覚野に至り、さらにインパルスとなって脳の中核に達するのである。その電気的・化学的・物理的・生物学的な反応であるインパルスによる物理的な情報（魂をふるわすような美しさ）を感じるその心とは、どういう関係があるのか。大きな謎である。

外部の情報（物理的に脳内に伝達されていく）という神経細胞の反応とか反応の部位などの物理的・化学的・生物学的な現象のメカニズムは次第に解明されつつあるが、しかしながら、こうした物理的・生物学的な反応としての情報（読み取る）あるいは心的な内容として知覚される、その関係はどうなっているのか、全く分かっていないといわれる。いわば脳というサブシステムのメカニズムしか脳科学は分からない。そうすると人間の死とは脳死であるとするならば、動かなくなったのはこのサブシステムであるが、それによって、（読み取る）（知る）（感じる）主体である心は、脳死によって滅するのだろうか。そこは全く未知の謎であるとするなら、脳死は同時に心の死滅であるというのは、独断ではなからうか。

D 「本当の無限というのは、あらゆる有限を包みつつ、一つ一つの有限なるものの中に無限を表していく。ちょうど、

夜の天上の月は十方世界の万物を照らし包んでいるが、庭の小草の露に月ご自身を宿すように。無限は有限を包みつつ、有限の中に無限を表す。それが無限なるもののはたらしめない光明で、万人を照らし包みつつ、有限な私の中にご自身を表し、与えてくださるのですね。不思議ですね」

A 「なるほど、小さな草の葉末にある露にも月はその姿を宿していますね。そのように、広大な阿弥陀仏は小さな人の心にもそのはたらしを現されるのですね。さて、阿弥陀仏は永劫に万人の大施主となつて救いたいとの志願ですが、そうすると真宗の救済とは施しをいただくことですか」

*

D 「そうなのです。阿弥陀仏から不思議な恵みをいただくのです。真宗の（教え）は、教えを聞いて、これから教えに従い、教えの通りになるように私が修行していくという道ではありません」

A 「真宗は阿弥陀仏からの恵

みをいただく宗教なのですね」

D 「そういつていいと思います。ただその贈りものは阿弥陀様ご自身といつていいと思いません。阿弥陀仏はその本質を変えず、自己を限定して南無阿弥陀仏となつて私に与えられる、とお聞きしています。不思議なことですよ」

*

A 「阿弥陀仏の恵みを、ではどういただくのですか」

D 「それは南無阿弥陀仏の名号を信受することです。名号を聞き受けて捨てているのが私たちです。いえ、南無阿弥陀仏の贈りものをくださるうとしていないことも知らないのです。また知つても、それを受け取ろうとしません」

A 「南無阿弥陀仏を受け入れないのですか」

D 「ええ、拒絶し続けてきたのです。阿弥陀仏からの恵みを素直にいただくのを（聞く）といひ、また信心といつていふのです。ですから信心一つが肝要なのです。執持鈔には（往生浄土のためにはただ信心をさきとす、そのほかをば、かえりみざるなり）といわれているとおりです」

（了）

信心夜話

○お園同行の言葉

ある人云く、「私はたのむ一つで御助けと決定してをります」

と領解を述べたれば、おその曰く、「たのむものがお助けなら、たのまぬものは尚お助けぢや。たのむをわれから見る世話のいらぬ、お助けがうれしうござります」

(「信者めぐり」より)

あるお同行さんが厚信の妙好人であるお園同行へ「私はたのむ一つで御助けと決定しております」と話した。それを聞いたお園さんが「たのむものがお助けなら、たのまぬものはなおお助けじゃ」と言われた。

これはお同行さんが「私は弥陀をたのんでいますから、お助けは間違いないと決定しております」というようないいぶりでなかったかと思う。「私は弥陀をたのんでいる、だから阿弥陀様は助けてくださるに間違いはない」というような領解であろう。それは真宗の教義の上ではその通りであろうが、しかしそこにお園さんは、自分の機の上に助かる(何か)いわば(因)を見ようとしている計らいを感じておられたのであろう。「弥陀をたのんでいるから、お助けに間違いがない」というの

は、自分のたのみ心を見て、これなら往生間違いなしと思っっているのである。

しかし、自分の心の上に「これでこそ弥陀をたのんでいる」というような何かしつかりした心があるのを見て、それを浄土往生の証拠のように思うのは、やはりまだ自分の心をたのみにしているのである。自分の心に「これこそ弥陀をたのんでいる」というような、例えば、有難い心があるとか、うれしい心があるとか、ご恩を感じる心があるとか、浄土が慕われる心があるとか、自分の姿に目覚めたとか、浄土を感得したとか、なにか仏法気のある心を自分の心に認めて、「これでこそお助けに間違いはない、助けられることは確かだ」と思う。しかし、それは自分の心の有様であって、そのありようが善いからお助けは間違いないと思うなら、それは弥陀をたのんだのではない。まだ自分の良い心、殊勝な心をたのみにしているのである。

それを感じたお園さんは続いて「たのむをわれから見る世話のいらぬ、お助けがうれしうござります」と自らの領解を語られた、それは自分の心に一切助かるしるしを見る必要のない、まるまるのお助けをお園さんは示されたのである。

「たのむものをお助け」の本願のいわれは、(我をたのんだら助ける、たのまなければ助けない)というお心ではない。私の心にたのむたのまぬも

ない、まるまるダメな、助かる縁の一つもない、後生の用意は一つも出来ない、そういう「助かる縁なき」者に、(そのままなりで助けるで、われをタノメ)の大悲である。それが「たのむものを助ける本願」のいわれである。

たのむ心もない、信じる力もない、まったく落ちるより仕方のない者にたいて、「そんなお前だから、我が引き受けるで、タノメ」の仰せなのである。それは私どもに対する要求ではなくて、どこどこまでも我らを見捨て給わず、撰め取らずにはおかないという大悲そのものなのである。その場合の「タノメ」は、阿弥陀仏が「我が願力で汝を受け取るから、心配するな」というまるまる助けたまい、引き受けたもう思し召しを伝えるお言葉である。

「タノメ」の仰せは「助ける」の仰せと同じで、そのまま私たちは仰せを聞くばかり、お聞かせいただくばかりで、そのほかに何もいらぬのである。弥陀をたのんでいるかどうかを自分の心の中に見る世話はいらぬのである。たとえ弥陀をたのんでいるような心があつたとしても、それで助かるのではない。また弥陀をたのんでいない心があつても、それでも助からぬのではない。私の心の内容に係なく、阿弥陀

陀仏が「助ける」と仰せられるから助けていただくばかりなのである。我が身の助かる証拠は我が心の中にあるのではない。口に出てくださいる南無阿弥陀仏が(我、汝を救う)という、私の助かる大悲大悲のお知らせであり証拠である。(了)

《任職雑感》

十月の後半から、急に涼しくなり、暖房すら必要になってきた。今年の夏は猛暑続きで、自然のサイクルの狂いを感じ、地球環境の悪化が懸念される。地球人口は加速度的に増えているが、日本では逆に少子化対策をしようとしている。それは将来の労働人口の事を考えて、日本経済の活力を維持したためであろうが、人口問題は地球規模で考えないと、お互いの国が一国の繁栄だけを考えているとそのツケは地球規模で回ってくるのではなからうか。

先月、高校時代のクラブ(文学部)の同窓会が京都であった。四十年ぶりにあった知人もいた。風貌はお互いにだいぶ変わって、会っても誰だっただか思い出せない人もいた。会食の中で、どう人生を送ってきたかの一端をそれぞれが語る。特に

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(土) 午後二時始まり

法話・念佛寺住職

女性たちの話にはいろいろな苦しいことを経ての

話が多く。(人生は苦である)ことをあらためて感
じさせられた。